こちらは見本用のPDFです

目　次

本書は、新しい評価の観点（３観点）に基づき作成しています。

○執筆者紹介 …… 2
○まえがき …… 3
○目次 …… 4
○本書のねらい、構成の意図 …… 8

第１章　図画工作科における学び

1. 図画工作科教育の意義と目標 …… 10
　1. 学ぶことの意義や目標を考えることの意義 …… 10
　2. 図画工作科の学びの意義についての誤解 …… 10
　3. 学習指導要領に示される図画工作科の目標と学びの意義 …… 12
　4. 子どもが今を生きることに結び付く学び …… 13
2. 図画工作科における主体的・対話的で深い学び …… 14
　1. 子どもの学びのありようを示す「主体的・対話的で深い学び」 …… 14
　2. 子どもの学びが、「主体的」かつ「対話的」であることの意味 …… 15
　3. 深い学びの実現過程 …… 17
3. 図画工作科の造形的な見方・考え方 …… 18
　1.「資質・能力」と「見方・考え方」の関係 …… 18
　2. 図画工作科の「造形的な見方・考え方」 …… 19
　3. 造形的な視点で捉えること …… 20
　4. 意味や価値をつくりだすこと …… 20
4. 図画工作科の学習指導要領の構造 …… 22
　1. 学習指導要領とは …… 22
　2. 図画工作科の学習指導要領の基本構造 …… 22
　3. 図画工作科の学習指導要領の目標及び内容の構造図 …… 24
　4. 図画工作科の目標及び内容の特徴と指導計画作成上の配慮事項 …… 25
5. 図画工作科で育む資質・能力 …… 26
　1. 各教科等で横断的に設定された資質・能力の三つの柱 …… 26
　2. 図画工作科で育む資質・能力 …… 26
　3. 図画工作科の資質・能力を育む学びの構造とその意味 …… 30

第２章　図画工作科の内容

1.「造形遊びをする活動」と子どもの姿 …… 32
2.「造形遊びをする活動」の指導のポイント …… 34
3.「造形遊びをする活動」の題材例 …… 36
4.「絵に表す活動」と子どもの姿 …… 38
5.「絵に表す活動」の指導のポイント …… 40
6.「絵に表す活動」の題材例 …… 42
7.「立体に表す活動」と子どもの姿 …… 44
8.「立体に表す活動」の指導のポイント …… 46
9.「立体に表す活動」の題材例 …… 48
10.「工作に表す活動」と子どもの姿 …… 50
11.「工作に表す活動」の指導のポイント …… 52
12.「工作に表す活動」の題材例 …… 54
13.「鑑賞の活動」と子どもの姿 …… 56
14.「鑑賞の活動」の指導のポイント …… 58
15.「鑑賞の活動」の題材例 …… 60
コラム「図工の時間…子どもの内部で起こっていること」 …… 62

第３章　図画工作科の指導法

1. 指導計画の作成 …… 64
2. 学習指導案の作成 …… 68
3. 意欲を引きだす！ 授業のポイント …… 78
4. 学びを深める指導の工夫①　材料についての工夫 …… 88
4. 学びを深める指導の工夫②　安全指導の工夫 …… 90
4. 学びを深める指導の工夫③　活動場所についての工夫 …… 92
4. 学びを深める指導の工夫④　ともに学び合う学習形態の工夫 …… 94
4. 学びを深める指導の工夫⑤　板書などの工夫 …… 96
4. 学びを深める指導の工夫⑥　学びの記録と評価の工夫 …… 98
4. 学びを深める指導の工夫⑦　作品展示の工夫 …… 100
4. 学びを深める指導の工夫⑧　保護者や地域との連携 …… 102
コラム「ICT機器の効果的な活用」 …… 104

第４章　図画工作科の実践事例

※低・中・高学年の実践事例、全26題材分の指導案例と解説を掲載。

1. 低学年　造形遊びをする活動①　幼児期の学びを生かして …… 106
2. 低学年　造形遊びをする活動② …… 110
3. 低学年　絵に表す活動① …… 114
4. 低学年　絵に表す活動② …… 118
5. 低学年　立体に表す活動① …… 122
6. 低学年　立体に表す活動② …… 126

7. 低学年　工作に表す活動① …… 130
8. 低学年　工作に表す活動② …… 134
9. 中学年　造形遊びをする活動① …… 138
10. 中学年　造形遊びをする活動② …… 142
11. 中学年　絵に表す活動①　水彩絵の具 …… 146
12. 中学年　絵に表す活動②　墨流し …… 150
13. 中学年　立体に表す活動①　気持ちをそえて！　ケーキしょくにん …… 154
14. 中学年　立体に表す活動② …… 158
15. 中学年　立体に表す活動③ …… 162
16. 中学年　工作に表す活動①　ペットボトル de カーレース!! …… 166
17. 高学年　造形遊びをする活動① …… 170
18. 高学年　造形遊びをする活動② …… 174
19. 高学年　絵に表す活動① …… 178
20. 高学年　絵に表す活動② …… 182
21. 高学年　立体に表す活動① …… 186
22. 高学年　立体に表す活動②　ゆかいな仲間たち …… 190
23. 高学年　工作に表す活動①　屏風づくり …… 194
24. 高学年　工作に表す活動② …… 198
25. 高学年　独立した鑑賞の活動① …… 202
26. 高学年　独立した鑑賞の活動② …… 206

第5章　図画工作科の学びの広がり

1. 図画工作科における研究授業づくり～教育実習での研究授業を中心として～ …… 210
2. 幼稚園・保育園・認定こども園等との学びの連続性 …… 212
3. 社会の中でのアート～地域社会とのつながり～ …… 214
4. 他教科との合科的・関連的な指導 …… 216
5. 学校生活の中での鑑賞活動 …… 218
6. 地域の美術館等を利用した鑑賞活動 …… 220
7. 図画工作科教育の変遷～第二次世界大戦後70年の歩み～ …… 223
8. 情報機器の活用①～デジタルカメラを活用した活動の基礎～ …… 226
9. 情報機器の活用②～情報機器を活用した教師の指導～ …… 228

巻末資料 …… 231

1. 絵の具で描く …… 232
2. 墨で表す …… 233
3. 粘土で表す …… 235
4. 木で表す（木材の加工法と用具） …… 236
5. 葉っぱや小枝、石などで表す …… 238
6. 針金で表す …… 239
7. ペットボトル、フードパック、ビニール袋で表す …… 240
8. 版で表す …… 241
9. 紙の特性、基礎知識 …… 242
10. 様々な接着剤、接着テープの性質 …… 244
11. 接着剤やテープを使わないくっつけ方 …… 246
12. 様々な切り方 …… 248
●平成29年告示小学校学習指導要領 図画工作 …… 250
●平成29年告示幼稚園教育要領（抄録） …… 253

本書のねらい、構成の意図

小学生だった頃を思いだしてほしい。子どもの頃のあなたにとって、図画工作科での学びは楽しいものであったろうか？　いろんなことを試してみたり、発見したり、友達に認めてもらったり、充実したものであったであろうか？　もし、このような充実した学びを体験してきたのであれば、教師を目指す今、図画工作科の授業をどのように実践すればよいのか、おおよそのイメージはできているであろう。そして、自分自身が体験してきた授業と同じように、または、それ以上に充実した学びが実現できるようにと意欲的に考えていてくれるだろう。しかし、そのような授業を受けた経験があるからといって、すぐさまその経験を生かして教師として授業を実践することは難しい。なぜならば、授業の背後には、教師の図画工作科教育についての理念、知識や技術、そして、子どもたちが楽しく主体的に学ぶことができるように考えだされた様々な工夫があるからである。一つの授業を実践するためには、様々な準備が必要になる。それは、授業の前に材料や用具をそろえるということだけではない。図画工作科の学びについてよく知り、よく考えておく必要があるということである。

教師になるためには、よい授業をしたい、よい先生でありたいという気持ちをもつことはとても大切なことであるし、必要なことである。しかし、それだけでは決して十分ではない。最低限の知識や技術、そして、よりよい授業を目指して指導の工夫を考え、試み、見直し、再度試みるといった試行錯誤することも必要である。このことが、よりよい授業を生みだすための力になる。その力を身に付けるための一つの手掛かりとして本書を活用してほしい。

本書は、主にこれから教師を目指す若い学生に向けて書かれたものである。教育実習や実際に教師になって図画工作科の授業を行う際に必要な基礎的なことを中心に、できる限りわかりやすく伝えることができるよう体系的に構成した。もちろん、すでに教師として活躍している先生方にも読んでほしい。実際に図画工作科の授業を実践しているからこそ学べることもある。実際に授業を考え、考えたことを試みることによって実践上の課題が見えてくるはずであり、このとき基礎的なことを再度確認することで課題を乗り越える手掛かりが具体的に見えてくる。これこそが体験的な学びであり、よりよい授業実践を目指すために必要なことではないだろうか。このような考えから、図画工作科の授業実践に資することを前提として本書は構成している。具体的には、以下のように構成した。

第Ｉ章から第３章までは図画工作科の学びの理念、学習する内容、指導の方法について示している。第Ｉ章では、平成29年3月に改訂された新しい学習指導要領を基に図画工作科における学びの基本的な考え方について示している。第２章では、学習の内容である「造形遊びをする活動」「絵に表す活動」「立体に表す活動」「工作に表す活動」「鑑賞する活動」のそれぞれについて示している。第３章では、授業を立案する方法から授業を実践する際の様々なポイントまで具体的な授業の方法について示している。いずれも基礎的なことなので、確実に身に付けてほしい。第４章では、図画工作科の具体的な実践事例を低学年から高学年まで示している。丁寧に準備され実践された授業の事例を示しているが、決して授業のお手本ではない。そもそも授業にはお手本となるようなものはない。学校や子どもの状況に応じて、工夫すべき点などを変えていかなければならないからである。自分であればどのように授業を展開するか、工夫するか、このようなことを考えながら読んでほしい。第５章は、図画工作科の授業をより充実させ、多様に展開するための方法や事例について示した。授業を工夫するポイントはたくさんある。この章で示したことを手がかりに、さらに授業を幅広く展開させてほしい。加えて、巻末資料として「図画工作科で用いる材料や用具」について、また、新しい学習指導要領等の資料を付けた。自身で授業の研究する際に活用してほしい。

第1章

図画工作科における学び

第１章では、図画工作科教育の基本的な考え方について平成29年３月に告示された新しい小学校学習指導要領に沿って確認、検討する。学習指導要領とは教育課程を編成する際の基準として文部科学省から示されているものであり、すべての学校でこの学習指導要領を基にして教育活動を行うことになる。教師は、実際に授業を考え、実践する前提として学習指導要領に何が示されているのかを把握し、理解しておかなければならない。ただし、教師が従わなければならない教育課程の基準としてのみ学習指導要領を捉えるのではなく、その背後にある考えを読み、解釈し、教育に関わるみんなで一緒に育て上げていくものとして捉えてほしい。学習指導要領を手掛かりに、よりよい授業実践の実現を目指そう。

1.図画工作科教育の意義と目標

第Ⅰ節では子どもが図画工作科で何のために、何を目指して学ぶのか、その意義と目標について確認、検討しよう。そもそも子どもが何のために何を目指して学んでいるのかを考え、把握することは、教師にとって大切にしなければならないことの一つである。これを踏まえた上で、図画工作科教育の理念や内容、方法等について学ばなければ、それらを十分に理解することはできないからである。

1. 学ぶことの意義や目標を考えることの意義

子どもが図画工作科という教科を学ぶことに、そもそもどのような意義があるのか。そして、その意義に基づいてどのような学びの目標が設定されるべきなのか。図画工作科の内容や方法について学ぶ前に、まずこのことをよく考えてほしい。この問いに関しては、まず、いわゆるＱ＆Ａ形式で答えられるような単純な解答があるわけではないことはあらかじめ断っておこう。学ぶことの意義を単純化してしまうことは、多様な可能性を排除することにつながってしまう。したがって、ここで学ぶことの意義をたった一つの解答として示すことはない。考えるための手掛かりを示すのだと考えてほしい。大切なのは、学ぶことの意義や目標を教師、また、教師を目指す学生諸君が自分自身で考えることである。

図画工作科で学ぶことの意義を考えなくても授業は一応はできるといえる。授業の方法は、このテキストにはもちろんのこと、様々な教師用の参考書等に示されているし、研修会等でも指導を受けることができる。しかし、ベテラン教師の上手な授業実践や、お手本として示された学習指導案をそのまま真似たとしても、子どもにとって有意義な学びになるとは限らないことを知っておかなければならない。他の教師が指導する子どもとあなたが指導する子どもは違う子どもなのであるから、学習指導の在り方も変わってくるはずである。したがって、学習指導の在り方に正解のようなものはない。教師自身が、授業実践のたびに学習指導を工夫していかなければならない。このとき、子どもにとっての図画工作科の学びの意義を考え、理解しておく必要がある。意義を理解し、その上で学びの目標を設定することで初めて学習指導の工夫を検討することができるからである。

もし、教師が学ぶことの意義を理解していなければ学習指導は形式的なものになり、子どもの活動は、ただ指示されたことを実行に移しているだけのものになる。その結果、授業の時間は子どもにとって無駄な時間になってしまう。場合によっては、無駄であるどころか、子どもにとってただ苦痛で、辛い時間にもなりかねない。同じことは教師自身にもいえることである。図画工作科の授業をしなければならないからと、誰かに決められたことをただ行動に移すだけでは空しすぎるとはいえまいか。

教師は子どもの生きる時間をかたちづくる上で重要な役割を担うのであり、重い責任を背負っている。したがって、子ども一人一人の時間が充実するように、教師は子どもが授業で学ぶことの意義をしっかりと考えなければならない。それは子どものためだけにすることではない。教師が自身の時間を充実したものとして生きるためでもあり、自身の仕事に誇りをもち、よりよい教育を目指し自らの思考や技術を向上させるためでもある。

2. 図画工作科の学びの意義についての誤解

子どもの学びの意義や目標を考えるコツは、なんとなく当たり前と思っていることを疑ってみることである。すると、当たり前と思っていたことは先入観に過ぎず、思いがけない誤解をしていたと気付くことがある。いくつか例を挙げながら考えてみよう。

例えば、図画工作科での子どもの学びの意義は、上手な絵を描けるようになることであると考える場合がある。もし、ある子どもが上手に絵を描くことができ、誰かに「上手に描けたね」と褒められれば、たいていの子どもは喜ぶであろう。自分のことを肯定してもらえることは、子どもにとってとても貴重な体験であり、おそらく学びへの意欲を向上させるであろうし、結果的に生活を豊かにしてくれるであろう。しかし、すべての子どもが絵を描くことによって褒めてもらわなければならないと考えるのは不自然である。絵が上手な子どもがいれば、走るのが速い子どももいるし、料理が得意な子どももいる。絵でなければならない理由はどこにもない。誰もが等しく上手に絵を描けるようにならなければならないということはない。したがって、子どもが上手に描けるようになることは、決して否定されることではないが、図画工作科で学ぶ上で重要な意義になるとはいえない。

次に、例えば、美しさという価値を手に入れ、理解することが、図画工作科で子どもが学ぶことの意義であると考えてみよう。絵を描いたり、立体作品をつくったりすることは価値を手に入れるための手段にすぎないと考えてみたわけである。しかし、美しさとは一体何か。どのようなものに美しさを感じるのかは、個人によって異なる。また、美しいとされるものが人々の間で共有されるとしたとしても、その地域や時代によって異なるのではなかろうか。例えば、「日本の美」という言葉があるのは、日本に特有の美しさのありようがあることを表しているはずである。地域や時代等に関係なく、普遍的な美しさというものを見いだすことは難しそうである。そうであるならば、美しさというものを教え与えることができるとすれば、限定されたある特定の「美しさ」の形式もしくは「美しいとされるもの」ということになる。しかし、特定の価値観を教えることには大きな危険性が伴う。危険性とは、それ以外の価値観を排除してしまうことである。それならば、と美しいとされるもののすべてを網羅するように教え、子どもに獲得させると考えることもできる。しかし、それはもちろん現実的な考え方ではないではない。同じことは、子どもが手に入れるべきものを変更してもいえることである。つまり、獲得すべきものを価値から知識や技術、または、能力等と置き換えて考えてみても同じである。図画工作科に関わる知識や技術、能力等は数え上げればキリがないのだから。

では、例えば、価値、知識や技術などについて、将来に役立つことが予想されるものに限定して教えればよいのではないか、と考えることもできるかもしれない。子どもが自分自身の生活に役立つものを手に入れることが、子どもにとっての学ぶことの意義であるいうわけである。これはもっともな考え方である。ただし、そのためには子どもの未来を教師が予想しなければならない。しかし、未来とはそもそも未だ来ていないものなのだから、役立つものを予想したとしても実際にそれが子どもの将来において役立つという保障はどこにもない。

また、子どもの立場に立てば、実際に役立つかどうかもわからないものを手に入れる努力をしなければならないのだから、それ相応に苦しい活動を強いられることになる。つまり、こんなことをして何の意味があるのだろうかという疑問をもちながら特定の知識や技術等を獲得する努力をしなければならない。それは大人にならなければわからないことだからと、無理やり学ばせることもできようが、果たしてそうして学んだことはどれほど子どもの身に付くであろうか。仕方なくさせられることは、そうしなければならない状況から解放されてしまえば、もうやらない。嫌々学ばされたことは、大人になってしまえば忘れてしまうかもしれないし、忘れないまでも学んだことをより深め、実際の生活において積極的に活用しようとはしないのではないだろうか。

私たちは今という時間を生きているのであり、未来を生きることはできない。子どもは自身の生活をかたちづくっている現在においてこそ学びの意義を実感できる。そして、それが学びへの意欲に結びつくのではないだろうか。ただし、だからといって子どもが授業の時間をただ楽しむことができればそれでよいと安易に考えてはならない。そのような時間は、子どもにとって有意義なものにはならないことは容易に想像できるはずである。刹那的な喜びや楽しみを求めることは、学びを、ひいては有意義に生きることを放棄しているに過ぎない。そもそも、今という瞬間だけを切り取って子どもの生きることを考えることは決してできない。今を生きるということは、逃れることのできない過去を背負い、希望や不安を抱きながら未来へ向かうということである。そのような今に関わることで学びは有意義なものとなるはずである。

以上のことを踏まえるならば、さしあたりは特定の限定された知識や技術、価値観、もしくは、能力等といったものを獲得することが図画工作科で学ぶことの中心的な意義になるとは言い難い。このことは、将来に役立つものを想定し、それらの取り扱う範囲を精選したとしても同じである。図画工作科で子どもが学ぶことの意義は、子どもが生きている現在に直接的に関わるようなものでなければならない。

3. 学習指導要領に示される図画工作科の目標と学びの意義

ここで、小学校学習指導要領に示されている図画工作科の目標を確認し、学びの意義について検討するために新たな視点を加えよう。教科の目標には、当該の教科において何を目指して学ぶかが総括的に示されている。何を目指すのかということの前提には、そもそも何のために学ぶのか、学びの意義を意図していなければならないはずである。したがって、教科の目標からは、その教科の学びの意義を読み取ることができるはずである。そこで、学習指導要領に示されている図画工作科の教科の目標を確認しよう。

【図画工作科の目標】

表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方･考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質･能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。

(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

(3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。

図画工作科に限らず、各教科等の目標は柱書（最初の一文）と育成を目指す資質・能力を三つの柱で整理し、(1)〜(3)で示している。(1)は「知識及び技能」、(2)は「思考力、判断力、表現力等」、(3)は「学びに向かう力、人間性等」というようにそれぞれ図画工作科で育む資質・能力を表している。これについては第５節で詳しく述べるので、ここでは柱書について詳しく検討しよう。

まずは、柱書の最初と最後に注目し、文章を単純化してみよう。すると「表現及び鑑賞の活動を通して、…資質・能力を…育成することを目指す。」となる。なお、冒頭の「表現及び鑑賞の活動を通して」は図画工作科の活動内容を表しているから、「図画工作科での学びの活動を通して」という程度の意味である。となると、図画工作科の目標の中心は、資質・能力を育成することであると読むことができる。しかし、この目標をそのまま図画工作科の意義であると解釈してしまうと、先に検討してきた問題とぶつかってしまうことになる。

そこで、次に、これらの資質・能力がどのような性質をもつものであるのかを確認する必要が出てくる。柱書から「資質・能力」の語句とそれを形容する部分を抜き出すと「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」となる。このことから、図画工作科で育む資質・能力は「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる」ためのものであることがわかる。つまり、図画工作科の目標は資質・能力を育成することであり、このことは生活や社会の中の形や色などと豊かに関わるためである。子どもが何のために学ぶのかといえば、生活や社会の中の形や色などと豊かな関わりをもつことができるようにするためであるということができ、したがって、これが図画工作科の意義であると解釈することができる。

『小学校学習指導要領解説 図画工作編』を確認すると「生活や社会の中の形や色」とは、「家庭、地域、社会で出会う形や色、作品、造形、美術など」[1]とある。しかし「豊かに関わる」ことについては特に説明らしきものは示されていない。ただし、育成を目指す「資質・能力」やそれを育成する際に働かせる「造形的な見方・考え方」について詳細に検討していけば、「豊かに関わる」ことの意味を読み取ることもできるはずである。「造形的な見方・考え方」については第３節、「資質・能力」については第５節で詳細に検討するので、そちらを読み、あらためて自身で考察を展開してほしい。以下では、そのための手掛かりとなるよう一つの考え方をごく簡単に示しておこう。

1）文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』日本文教出版、2018 年、p.11

4. 子どもが今を生きることに結び付く学び

さて、図画工作科で子どもが学ぶことの意義を検討してきたが、とりあえずの考えをまとめなければならない。先に、学びの意義は子どもの生きている現在と結び付かなければならないとし、また、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わることとした。子どもは、今この時間を様々な対象や事象、他者と関わりながら生活し続けている。誰であれ、様々な対象や事象、他者と関わることなしに生きること＝生活することはできない。そして、その関係は常にすでに変化し続けている。一つの対象との関わりを例に挙げて考えてみよう。例えば、子どもの前に色鉛筆のセットがあったとする。常識的に考えれば、これは絵を描く用具として子どもの自己に関係付けられている。しかし、それが買ったばかりの真新しい状態であったらどうであろう。わくわくする気持ちを生みだす対象にはならないだろうか。長さがそろってグラデーションをつくりながら並べられている状態をきれいだと思うかもしれないし、これから何を描こうかと楽しみに思うかもしれない。使っているうちに一本の色鉛筆だけがたくさん削られて短くなり、少しさびしい思いをもつかもしれない。それとも、絵を描いたたくさんの楽しい思いが積み重なり、宝物のようになるかもしれない。このように、状況に応じて対象との関係は刻々と変化し続ける。そして、変化し続けるたびに対象との関係は複雑に、つまり、豊かになる。

逆にこのような関係が変化しないと考えてみてはどうだろうか。様々な対象や事象、他者との関係がシステマティックで単純なものになったとき、私たちは生きているというよりも、システムを構成する一つの要素のように、機械の歯車のようなものになる。関係が単純になると思考や行動がパターン化していくからである。これを徹底すれば思考や行動はあらかじめ決まったことを繰り返すことにとどまり、過去や未来から切り離された現在を繰り返すことになる。つまり、過去から導かれる現在も、未来へ向かおうとする現在もなくなる。そうであるならば、対象や事象、他者との関係が貧しいものになり、生きることそのものまでもが貧しくなるとはいえまいか。

そうであるならば、対象等との関係が変化し続ける学びこそが子どもの生きる現在と結び付くといえそうである。絵を描きながらその子どもなりに新たな表現の仕方を発明したり、色や形の見方を発見したりして、対象などとの関係を造形的な視点から新たにする。関係を新たにするとは、それまでの対象や事象、他者との関係が更新され、新鮮な今という時間が生まれるということである。図画工作科の学びを通して「面白い」「やってよかった」「もっとやってみたい」という言葉が子どもから出てきたならば、それは関係が変化することで新たな現在を体験し、生まれ変わるような喜びを実感しているからではなかろうか。

さらに、もし豊かに生きるということが対象や事象、他者などとの関係を変化させ、つくり変え続けることであるならば、子どもの成長、発達とは、生きていることを豊かにし、充実させることとほぼ同義であるとはいえまいか。成長、発達するとは、まさに子ども自身の変化とともに対象等との関係を変化させることだからである。もちろんそれは、決められた型に様々な関係を閉じ込めることではない。むしろ、当たり前のものとして与えられてしまっている関係を開いていくことである。図画工作科の学びとは、このような対象や事象、他者などとの多様な関係を変化させ、再構築することを造形的な側面から行っていくことではなかろうか。

このような考え方は多くあるであろう学びの意義についての一つの考え方にすぎない。だが、このような考え方は、学びを子どもが豊かに生きることに直結させると考えられる。これをきっかけにして図画工作科の学びの意義を自身で考え、実践の目指すべき在り方について考えてほしい。（新野貴則）

2.「造形遊びをする活動」の指導のポイント

「造形遊び」では、子ども一人一人が身近にある材料や環境との関わり合いにおいて、自分の感覚や行為などを通して捉えた形や色などの特徴をもとに、そこから生まれる自分なりのイメージを広げるなどしつつ、思いのままに発想や構想を繰り返すとともに、手や体全体の感覚などを働かせながら技能などを発揮し、様々なかたちをはじめ、場や状況をつくり、つくりかえていくことが期待されている。

以下では、小学校学習指導要領解説をヒントにしながら、指導のポイントについて見ていくことにする。

1．材料や場所などとの関わりからの「発想や構想」を豊かにするために

「造形遊び」において子どもが意識する関わり合いの範囲は、低学年の「自分の身の回り」から高学年の「周囲の環境」まで、学年を重ねるにつれて広がっていくといわれる。このことを踏まえ、指導にあたっては育みたい資質・能力の一つである「思考力、判断力、表現力等（この場合、発想や構想）」の育成の観点に立ち、活動と材料などの関係に配慮し、「例えば、材料からの発想を広げるために、材料の種類や量を豊富に用意したり、材料からの発想を深めるために、材料の種類や量を少なくしたりするなど」（『小学校学習指導要領解説 図画工作編（平成29年6月）』p.28、以降、頁表記）が大切である。つまり、材料の種類や量を豊富にすることで、それらを様々に組み合わせたり置き換えたりすることによりイメージを次々に展開させ広げていくことが期待され、逆に材料の種類や量を少なくすることで、限られた材料を隅々まで見たり触ったりすることにより探究が深まり、イメージをより明確にさせることが期待されるのである。

また、「場所」については、活動を始めるにあたり、普段とは異なる状況につくりかえておくという工夫が考えられる。例えば、教室内で新聞紙による造形遊びをする際、あらかじめ教室中を新聞紙で覆い、普段とは異なる世界を用意しておくなどである。そうして「思考力、判断力、表現力等（この場合、発想や構想）」を働かせることで生まれる、子ども一人一人で異なる思いや願いを大切にすることも忘れてはならない。

ところで発想や構想が不得意な子どもには、まず材料や環境に関わってみることを提案するのもよいだろう。次項２．にも関わることだが、例えば並べたり積んだりすることから何らかのイメージが生まれてくるということもあり得るからである。また材料の確保に関しては、普段から身近にあるものに関心をもってこまめに集めておくとよい。あるいは子ども自身が材料集めをすることも大切である。同時に活動場所についても、教師が学校内外の環境を常に新鮮な目で見つめ直すことも重要である。

2．活動を工夫して「技能」を高めるために

「技能」とは「発想や構想」の実現のために発揮される資質・能力の一つであるが、『小学校学習指導要領解説 図画工作編』では「低学年では、身の回りの材料を並べる、つなぐ、積むなど、手や体全体の感覚などを働かせて（p.29）」「中学年では、身近な材料や用具を組み合わせたり、切ってつないだり、形を変えたりするなどして、手や体全体を十分に働かせて（p.29）」「高学年では、経験や技能などを総合的に生かしたり、方法などを組み合わせたりするなどして（p.29）」活動を工夫してつくることが要件とされている。このことを踏まえ、指導にあたっては活動と材料などの関係に配慮し、例えば「材料や用具の経験を総合的に生かすような題材を構成する（p.30）」こととして「手や体全体を使って長く並べたり高く積んだりできる場所を工夫するなど（p.30）」が考えられる。つまり子どもたちの「手や体全体」を使って並べたり積んだりするような活動内容を保障するためには、それにふさわしい場や状況を設定することが不可欠なのである。また技能は発想や構想を実現するだけではなく、技能自体を働かせる中から新たな発想や構想が生まれることもあるといえ、発想や構想が不得意な生徒への対応も含め、まずは並べたり積んだりするという技能面の提案から活動を始めてみるということも考えられよう。なお用具の使い方については、活動を工夫して創造的につくる中で身に付くものでもあるため、安全面に配慮しながら積極的に使用できる環境を整えておきたい。また、造形遊びの場合、必ずしも活動の最後に形が残るとは限らないが、「技能」は確実に育成されているので、子どもの活動の様子は作品という結果だけでなく「資質・能力」の視点から捉えることが大切である。したがって、それらを写真や動画等に記録しておくことも重要である。

3．友達と自然に交流する場の設定／友達との関わり

子どもは他者（＝友達、以下友達）との関わり合いから新しい発想を生みだしたり、友達がしていることを真似してみる中で新たな技能が身に付いたりもする。あるいは、友達が試みていることに関心をもち、それを自分なりに解釈して取り組んでみたりすることで、例えば自分では捉えられなかった材料等の特徴を知ることができたり、そこに自分なりに関わり合ってみたりしようとすることにつながる。

こうした子どもを取り巻く友達の行為は、材料や場所などと並んで、あるいはそれ以上に、子どもの発想や構想を刺激することがあるし、技能を身に付ける際の一助となり得ることもある。したがって、そうした友達と何気なく関わり合える場や状況を設定することはとても重要なことである。授業の中で子どもが随時そのような場や状況を共有することができるように配慮したり、そうした関わり合いの中に入りづらい子どもへの配慮として、友達との関わり合いの場や状況を教師が設定したりすることも必要である。

4．「B鑑賞」の活動との関連

表現と鑑賞は互いに密接な関係にある。子どもが美術作品や友達の作品、及び造形的な行為などに関わり、そこで自分の感覚を働かせて感じ取ったことなどをもとに、自分なりの見方や考え方を広げ深めることが、次の自分の表現活動の根拠になるなどといったことが考えられるからである。

例えば「低学年では、自分たちの身の回りの作品や材料など（p.32）」、中学年では「身近にある美術作品や製作の過程など（p.32）」、「高学年では、社会や文化も対象に取り入れ、分析的に見ることもできるようになるので、我が国や諸外国の親しみのある美術など（p.32）」がその主な対象といえよう。解説では「視覚だけでなく触覚や聴覚などの様々な感覚を働かせて鑑賞する、児童が造形活動の中で自然に自分や友人の作品などを見ることも鑑賞として捉えるなど、鑑賞活動を幅広く捉えること（p.32）」が大切であると示されている。「造形遊び」において材料や環境などに関わり合ったり、友達の行為を共有したりする中で、こうした鑑賞との関連にも留意した指導を心掛けたい。

5．〔共通事項〕との関連

〔共通事項〕とは、表現及び鑑賞の活動の中で、共通に必要となる資質・能力であり、造形活動や鑑賞活動を豊かにするための指導事項として示されているものである。具体的には、アは「知識」に関するものとして「自らの感覚や行為を通して形や色などを理解すること（p.33）」、イは「思考力、判断力、表現力等」に関するものとして「自分のイメージをもつこと（p.33）」とされている。当然、これらは「造形遊び」の活動においても子どもに身に付け発揮してほしい資質・能力である。例えば、活動の中で子どもは「視覚や触覚などの感覚、持ち上げたり動かしたりする行為や活動（p.33）」を通して対象の形や色の特徴についての「知識」を獲得するとともに、それを活用しながら「思考力、判断力、表現力等（＝発想や構想）」や「技能」を働かせて新しい表現をつくり、つくりかえていくことが期待されるということなのである。さらにこうした活動の過程は、形や色を活用したコミュニケーションの過程ともいえ、子どもが友達とどのようなイメージを共有しながら活動を展開しているかを把握し、必要に応じて指導する際の手掛かりにもなるといわれている。ただし、〔共通事項〕とはこれだけを取り上げて指導するものではなく、「造形遊び」なら「造形遊び」という題材の中で、適宜指導するものとして心掛けておく必要があるといえよう。

（秋山敏行）

3.「造形遊びをする活動」の題材例

1.「ならべて　つなげて　ひろがるかたち」(1年生:2時間:合科教室)古鎌幸一(愛媛大学教育学部附属小学校)

材料や用具	洗濯ばさみ（7色)、黒ロール紙（色の組み合わせから思い付く活動への支援)、針金（つるす活動への支援)、厚紙（円や細長い形に切ったもの)

図1．洗濯ばさみをつなげて並べる。

❶題材の目標

- 洗濯ばさみの特徴を捉え、並べたり、つなげたりしながら、いろいろな形を思い付くとともに、並べ方や、つなぎ方を工夫している。[技][発][鑑]
- 洗濯ばさみの形や色に気付き、機能を基に、並べたり、つなげたりすることを楽しもうとしている。[知][態]

❷題材の内容

①大量の洗濯ばさみと出会い、材料への関心と活動への期待感が高まる。②洗濯ばさみを自由に操作することで気付いたことを基に、テーマを決定する。③洗濯ばさみの形や色、機能から発想したものを基に、形をつくり、つくりかえることを楽しむ。④つくった形を友達と紹介し合う。⑤友達の形づくりの工夫を参考に、自分の形づくりをする。

2.「ひらいて　つないで」(2年生:2時間:教室)古鎌幸一(愛媛大学教育学部附属小学校)

材料や用具	紙コップ、はさみ、ホチキス

図2．紙コップを切りひらいてお花のイメージを表す。

❶題材の目標

- でき上がる形を想像しながら、紙コップを切りひらき、ひらいた紙コップの形を捉えるとともにつなぐことを楽しみ、それらを教室内に飾ることにより、形の美しさを味わう。[知][態]
- ひらいた紙コップや、それらをつないでできる形からイメージを広げ、より豊かに表現するために、友達の表現なども参考にしながら、切り方やつなぎ方を工夫している。[技][発][鑑]

❷題材の内容

①紙コップを観察し、形の特徴を発表し合う。②紙コップを自由に切りひらく中で生まれる見立てやつぶやきを紹介し、つくり出した形の不思議さに気付く。③活動のめあてを「つないで形をつくりだす」と設定する。④でき上がる形を想像しながら紙コップを切りひらき、つないでいく。自分たちがつないだ形を認識しやすくするために、黒い掲示板や吊り下げる場を用意しておく。⑤活動の途中で教室全体を見渡す時間を設けることにより、自分の活動がすてきな空間を生みだしているという実感をもつ。

3.「ビリ・バリ・ダンボール」(3年生:2時間:図工室)井ノ口和子(武蔵野市立本宿小学校〈現:共栄大学〉)

材料や用具	段ボール箱（各種サイズ)、木工ボンド、粘着テープ、絵の具

図3．段ボールを破ったりつなげたりして形を表す。

❶題材の目標

- 身体全体を使って、段ボールを破る活動を楽しみながら、段ボールの特徴を捉え、形や特徴を基に、並べたり、つなげたりすることを楽しもうとしている。[知][態]
- 破り取った段ボールを並べたり、つなげたりしながら、いろいろな形を思い付くとともに、並べ方や、つなぎ方を工夫している。[技][発][鑑]

❷題材の内容

①大量の段ボール箱と出会い、材料への関心と活動への期待感が高まる。②段ボールを身体全体を使って自由に破る活動を楽しみながら、段ボールの特徴に気付く。③破り取った段ボールの形、特徴などを基に、折ったり、丸めたり、つなげたり、色を塗ったりすることで、形をつくり、つくりかえることを楽しむ。④つくった形を友達と紹介し合う。

4.「とびっきり　マイスペース」(4年生:2時間:体育館)菅沼晶子(元東村山市立南台小学校)(文責:井ノ口和子)

材料や用具	養生シート、PE（ポリエチレン）ひも（数色：装飾及び形態の工夫に使用)、ビニールひも・粘着テープの芯（児童の活動を促し、支えるための支援)、はさみ・カッターなど（グループごとに材料ケースに保管)、デジタルカメラ（鑑賞活動に使用)

図4．自分のイメージした空間をつくりだす。

❶題材の目標

- 養生シートの質感や特徴を身体全体で感じ取って捉え、体育館の好きな場所を自分たちの好きな空間につくりかえる活動を楽しむ。[知][鑑][態]
- 養生シートを使い、体育館の場の特徴と関わりながら、自分たちの居心地のいい空間を工夫して表現している。[技][発]

❷題材の内容

①活動の目標及び安全面での注意事項を確認する。②約10mに切った養生シートの特徴をグループの友達と一緒に確認する。③グループでお気に入りの場所を見つける。④養生シートを梁(はり)やギャラリーの柱に掛けたり、結び付けたりしながら空間をつくりだす。⑤自分たちのマイスペースや他のグループのスペースを楽しみ、見え方をデジタルカメラに記録する。

5.「玉公園と大変身〜まいて むすんで のばして かさねて〜」(5年生:2時間:公園・運動場)秋山敏行(愛媛大学教育学部)

材料や用具	ポリエチレンテープ（各色。計120個程度)、セロハンテープ、はさみ

図5．空間、テープ、友達の関わりからイメージする。

❶題材の目標

- テープを伸ばしたり転がしたりしながら身体全体で関わり合い、楽しみながら友達や遊具等を含む環境などとも関わり合おうとしている。[態]
- 自分や友達のつくりだしたものや環境との関わり合いからつくりつつあるもののイメージをもち、広げていくとともに、そこで思いついたことを基に新たな関わり合いをつくりだしている。[技][発][鑑]

❷題材の内容

①テープを屋外の一部遊具間に張り巡らせておく。②①を見たり触れたりして「やってみたい！」という思いをもち、それをもとにテープ等との関わり合いが始まる。③テープを遊具に巻き付ける、転がす、テープ同士を重ねたり並べたり光に透かしたりする。④テープが張り巡らされた空間を移動（鑑賞）して、自分たちがつくりだしたもののよさを面白さについて、身体を通して実感する。

6.「骨だけ建築」(6年生:2時間:校庭)大森直子(東村山市立萩山小学校)(文責:井ノ口和子)

材料や用具	瓦桟*（180cmと90cm、一人当たり15〜20本程度)、ゴムバンド、軍手 ＊（かわらざん）瓦を留めるための木材のこと。

図6．木材の組み合わせを工夫して建築物をつくる。

❶題材の目標

- ゴムバンドを使って木材を結束させ、組み立て方を工夫し、友達と関わり合いながら校庭に建築物を建てようとしている。[技][態]
- 木材の組み合わせ方を工夫し、その構造や空間の美しさや面白さに気付き、さらにつくりだそうとしている。[知][技][鑑]

❷題材の内容

①木材と出会い、ゴムバンドで結束させるだけの方法で校庭に建築物を建てる活動に意欲をもつ。②結束方法や安全面での注意事項などを確認する。③木材の組み合わせ方を工夫し、校庭にグループごとに建築物を建てる。④自分たちがつくりだしたもののよさや美しさについて、身体を通して実感する。

【参考】公益社団法人日本建築家協会関東甲信越支部「空間ワークショップ」

（秋山敏行）

2.学習指導案の作成

「図画工作科の授業はどのようにつくっていくのか？」という問いに応える形で、ここでは学習指導案の実例や学習指導案ができるまでのプロセスを実践的に紹介していく。

1. 学習指導案作成の意義

「学習指導案は、授業の設計図である」「学習指導案は授業の台本（シナリオ）である」

上記のように、様々に形容される学習指導案。その意義は、まず、指導者自身が授業に対する自分の考えをまとめるために書くところにある。

この題材で、子どもにどのような資質・能力を育てたいのかを明確にし、学習目標達成のために、子どもの経験や関心を生かして授業を展開していくアイデアを考え、書き表したプランが学習指導案である。指導者が自分の考えをまとめるワークシートとしての意味合いから、学習指導案には、様々な形が考えられている。学習指導案を考えることは、具体的に授業の流れをイメージし、資質・能力を発揮する子どもの姿を予想していくことになる。まさに、指導者にとってのアイデアの詰まった設計図であり、シナリオとなるのである。

学習指導案のもう一つの意義は、授業内容の伝達である。授業を参観する人にとって、何をどのように教えようとしているのかを、参観する人にわかりやすく伝える機能である。そこで、配慮されることは、誰にとってもわかりやすく共通に理解しやすいということである。学校や地域によって、統一した形式の学習指導案があるのも、共通認識しやすいという利点があるからであろう。

2. 学習指導案作成のポイント

一般的な学習指導案の記述例を挙げているが、記述の順序が前後する場合や、題材の評価と本時の評価をまとめて示す場合もある。学習指導案として必要な要素について解説する。

【図画工作科学習指導案】

1．日時・場所　➡２時間続きになったり、教室以外の場所で行ったりすることも多い。

2．学年・組　➡クラスの在籍人数

3．題　材　名　➡教材名、単元名とはしない。

題材名は、子どもたちへの提案の役割がある。題材名は提示したときに、「何だろう？　面白そう！　やってみたい！」という子どもの意欲を喚起するように様々に工夫されることが多い。木を材料にした題材であれば「トントン　ギコギコ」のように活動を示すものや、「もし、鳥になったら！」「窓を開ければ？」のように発想のきっかけを示すものなど。題材名が効果的に提示されると、クラス全体で題材のもつイメージが共有されていく。

4．題材について　➡指導に当たっての、児童観、題材観、指導観を書く。

児　童　観　➡題材の内容に照らし合わせて、子どもの造形における実態を具体的に述べる。

一般的には「本学級の子どもは…」または、「この時期の子どもは…」といった書きだしで始めることが多い。ここでは、子どもの造形的な資質・能力の実態を、知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度の三観点でよいところや課題について記述する。

題　材　観　➡題材の特徴と育てたい資質・能力について具体的に述べる。

「本題材は…」で書きだすことが多いが、まず、題材の概要を述べる。次に、子どもにとって題材がどのように受け取られるか、つまり子どもにとっての題材の魅力について述べる。さらに、学習指導要領の目標及び内容に照らして本題材で育てたい資質・能力について記述する。

指　導　観　➡児童観や題材観を踏まえて、具体的な指導の方法について述べる。

「指導に当たっては…」「指導の手立てとしては三つ…」など、指導者の役割について述べる。具体的には、導入時の提案の方法、子ども同士が学び合う場の設定、材料や用具などの環境設定、安全面や支援が必要な子どもへの手立てなどについて述べる。

※必ずしも「児童観」「題材観」「指導観」の順で書く必要はないが、この三つが論理的に一貫していることが重要である。「子どもの実態はこうなので、この題材でこんな資質・能力を高めます。だから、このように指導を工夫します」という風に読み取れるようにする。

5．学習目標　➡題材全体の目標を書く。

多くの場合「～を通して～するとともに、～を工夫して表す」のように、主な活動と資質・能力をまとめた形で一文に表す（観点別に書く場合もある）。

6．指導計画　➡「全○時間　―　本時は○時間目」

学習過程をおおまかな段階に分けて、第１次、第２次というように示し、それぞれの段階の目標と内容、配当時間などを書く。題材の学習内容がまとまりとして見通せるようにする。

7．評価について

評価は指導と表裏一体の関係にある。学習目標を具体の子どもの姿で表したものが評価規準と捉えてもいいだろう。評価規準は平成３年に導入された概念で、子どもがおおむね学習を達成した状況をＢ規準として観点別に評価の規準を示して評価していく。

8．本時の学習

⑴本時の目標　➡題材の学習目標に準じる目標を記述する。

⑵本時の評価規準➡本時の評価規準を記述する。（7．と同じ場合は省略する。）

⑶本時の展開

子どもの学習活動と指導者の役割に分けて記述する。本時の展開については、特に様々な書き方がある。指導者の働きかけに対して、予想される子どもの反応を時系列に沿って上から順に書いていくもの（p.70、71）と、子どもたちの活動の流れを放射状に広がりとして書いていくもの（p.72、73）の２例について、次頁より紹介する。

一般的な時系列スタイルのものは学習指導案の全体を、放射状スタイルのものは本時の展開に重点を置いて紹介する。

9．準備物　➡子どもと教師と分けて示す。

身の回りの材料など子どもと教師が一緒に準備するものもある。

図画工作科学習指導案（例①：時系列スタイル）

1．日時　　〇〇〇〇年　4 月 19 日（火）　　第５時限（　：　～　：　）
2．学年・組　　１学年　２組　（在籍　30 名）
3．場所　　多目的ホール（床に座って活動できる場所）
4．題材名　　「すきなかたち　すきないろ　見いつけた！」 造形遊びをする活動
5．題材について

⑴児童観（省略）

⑵題材観

紙を切りながら、「あれ！　おもしろい形ができた！」「〇〇みたいなのができたよ」とつぶやく子どもの姿は、日常的に教室で見かけることができる。本題材も、紙を切ることそのものを楽しむ題材である。子どもたちは、紙を自由に切りながら、好きな形を見つけ、そこから生まれる形や色からイメージを広げていくだろう。

切った紙を並べたり、重ねたりしながら、自分らしい感覚や気持ちを働かせて、「〇〇になりそう」「〇〇をつくっていこう」など様々に発想する姿が期待できる。また、活動の途中からは、周りの友達と一緒に活動するように設定している。友達との自然な鑑賞交流の中で、表し方を工夫するなど創造的な技能も発揮できると考えた。

⑶指導観

本題材は、「切りながら好きな形を見つける」活動に焦点を当てている。指導の工夫としては、「紙を動かしながら切ると、形が生まれてくる」様子を、子どもの前で実演をする。実演を通して、子ども達が紙を切ることそのものを楽しむことができると考えた。

また、自分の好きな形や色を並べたり、つないだり、重ねたりする場面では、友達と自然に鑑賞交流できるように、友達と向かい合って座る場の設定を考えた。

さらに「はさみ名人への道」というはさみの使い方のポイントを書いた掲示物を用意する。安全面の配慮だけでなく、はさみを自在に使える技能を主体的に身に付ける手だてである。

6．学習目標

紙を切りながら、好きな形を見つけ、さらに、並べたり、重ねたりしながら、イメージを広げて活動を楽しむ。

7．指導計画（全２時間）

- 紙を切りながら好きな形や色を見つけて、イメージを広げ表現する。（１時間）本時
- 自分や友達のつくった作品を見ることを楽しむ。（１時間）

8．評価について　※本時の展開で示す（ア）～（オ）の記号は、以下の評価規準を表す。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
• 紙を切ったり並べたりしながら、いろいろな形や色に気付いている。（ア［知］） • 紙を動かしながら切ったり、切ってできた形を並べたりつないだり重ねたりして活動を工夫している。（イ［技］）	• 切ってできた紙の形や色のイメージを基に発想し、並べたり、重ねたりしながらどのように活動するか考えている。（ウ［発］） • 造形的な面白さや楽しさ、表し方について感じ取ったり考えたりしている。（エ［鑑］）	• 好きな形や色を見付けてつくりだす喜びを味わいながら、楽しく活動している。（オ［態］）

9．本時の学習

⑴目標…紙を切りながら、好きな形を見つけ、さらに、並べたり、重ねたりしながら、イメージを広げて思い付いたり、どのように活動するか考えたり、活動を工夫したりする。

⑵本時の展開（１時間）※指導案で示す時間は、すべて「単位時間（１時間＝ 45 分）」。

学習活動	支援（指導上の留意点）	評価の観点と方法
１．学習のめあて①をつかむ。 めあて①　きりながらすきなかたちを見つけよう！		
【教師の働きかけ】 「紙を動かしながら切ると、形が生まれてくるよ。切りながら好きな形を見つけていこう」 【予想される子どもの姿】 • 怪獣の形に見える。 • ひっくりかえすと、ちょうちょみたい。	• 「はさみ名人」の掲示物を示して、はさみの使い方を指導する。 • 何かをつくろうと考えず、切ることを楽しむことを強調する。	
２．好きな色の紙を選んで、紙を切っていく。 • 切り残った紙も残さずに使おう。		（オ）（イ） 表情やつぶやき 活動の様子
３．学習のめあて②をつかみ、活動を広げる。 めあて①　ならべたり、つないだり、かさねたりして、お気にいりのかたちをつくっていこう！		
【教師の働きかけ】 「できた形をじっくり見ながら、並べたり、つないだり、重ねたりすると、もっとお気に入りの形になりそうだね」 【予想される子どもの姿】 • 友達のとくっつけたらおもしろそう。	• 切り取った形や色をもとに、思い付いたり、想像したりしたものを発表する場を工夫する。 • 次の時間の鑑賞活動につながるようにする。	（ウ） 表情やつぶやき 活動の様子 （エ）（ア） 会話の様子
４．自分が楽しくつくったことを、友達に話す。 ５．後片付けをする。		

⑶準備物…［教師］両面色違いの造形紙・全紙　［子ども］はさみ・のり

図１．授業の導入

図２．紙を動かしながら切ることを楽しむ。

図３．友達と高め合う場面

3.意欲を引きだす！ 授業のポイント

「図画工作科の授業は、実際にはどのように進めていくのか？」という問いに応える形で、準備、導入、展開、まとめの順にそれぞれのポイントを具体的に紹介していく。本節の最後に学生の皆さんがチームで模擬授業に取り組んだ事例についても紹介する。

1. 授業の実際①　準備のポイント

授業をする前に、どのような準備が必要なのかを考えて、丁寧に準備をすることが授業の質を高めていく。準備をしっかりすることで、気持ちに余裕ができて授業に集中することができる。授業中に足りないものに気付き、あわてて取りに行っている間に、子どもが用具の使い方を誤ってけがをしてしまったというようなことを防ぐためにも、事前に材料や用具、活動場所などについて考え、準備する必要がある。

（1）材料や用具の準備をする

子どもが持ってくるものに対しては、家庭への早めの連絡が必要である。新聞紙などは取っていない家庭もあるので、教師の方で準備するなど判断して、どの家庭でも用意できそうなものにする配慮も必要である。

材料集めを予告することで、「来週の図工が楽しみ！」といった期待感が高まり、さっそく持ってきた材料を見せ合ってつくりたいイメージが膨らむなど、授業準備の段階から子どもたちの資質・能力が働いていく場合もある。材料集めから図工を楽しむ子どもの姿も大切にしたい。

図１．材料コーナー

材料の量や形状について考えることも大切である。必要な量はどれくらいか。どのような大きさや形状がいいのか。子どもが試しながら活動できるだけの量を用意することや、扱いやすい大きさや形などを考えることが子どもの意欲を引きだすもとになる。

用具についても、事前に数量を確認するとともに、壊れていないか、使いづらくないかなどの確認をする必要がある。例えば、カッターナイフの刃の切れ味が悪いときは、刃を折って新しい刃にしておくなどの配慮が、子どもの安全を確保することになる。

図２．授業が始まる前

図３．材料を紹介する場面

（2）場所や場の設定を考える

活動場所についての工夫は、p.92､93に詳しく解説されているので、ここでは、場の設定について述べる。場所が決まったら、「場の設定図」のイラストを書くことをお勧めしたい。１枚の紙に、配置を書くだけのものであるが、子どもの動線が明らかになり授業中の活動がイメージしやすくなる。材料や用具を取りに行く途中や帰りに、子どもは友達の活動や作品をよく見ている。そのことも考慮して材料などの配置を考えるとよいだろう。

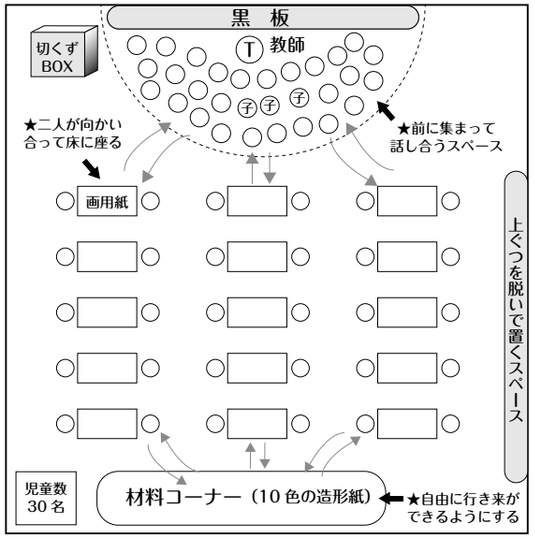

図４．場の設定図イラスト①

図５．場の設定図イラスト②

（3）板書計画や掲示物などをつくる

板書は子どもにとっての情報ボードである。題材名を見てワクワクし、今日の学習のめあてを見て自分のめあてとして受け止め、活動するためのヒントを見て見通しをもって安心して活動できるのである。板書の工夫については、p.96、97に詳しく解説しているので、ここでは、その他の掲示物などについて述べる。

図６．用具の使い方掲示物

導入をどうするかにもよるが、用具の安全な使い方の効果的な掲示物があれば、言葉や実演で説明した後も、子どもの意識の中に残りやすいことがある。その際、一目で理解することのできるシンプルな掲示物を心掛けたい（図６）。

導入で子どもの意欲を引きだすために、目の前で実演してみせるための掲示資料や、立体や工作であれば参考作品を２～３個、準備物として用意することもある（図７、８）。

図７．掲示資料

図８．参考作品

（4）子どもに提案する言葉を考える

他教科では、学習指導案の次に、さらに詳しい内容の指導細案を作成する場合が多い。

図画工作科でも作成する場合もあるが、活動を通して学ぶ教科なので、①題材を提案する場面や、②活動途中で活動を広げたり深めたりする場面での言葉を、指導細案として考えておくことは大切である。

4.学びを深める指導の工夫②　安全指導の工夫

図画工作では、様々な材料・用具を使ったり、教室を出て活動したりするので、場合によっては思いがけない事故が起きる可能性がある。子どもが安心して活動できるよう、材料・用具などの安全指導と、活動環境の安全点検を徹底したい。

1. 材料や用具の事故の例

原因となる材料・用具・場所等 （学習指導要領記載のものは太字）	事故例
刃物：**はさみ・小刀**・カッターナイフ・段ボールナイフ・彫刻刀など	指を切るなど
のこぎり・糸のこぎり・金づち・ペンチ	指を切る・打撲・指を挟むなど
針金	端で突く、目に入るなど
ホットボンド・ヒートカッター	やけどなど
接着剤	指などを接着する・目に入るなど
絵の具・溶剤など	誤飲・皮膚炎症など
立ち木・遊具など	落下など
プール・水場など	転倒など
図工室・教室	道具棚の転倒・倒壊など

刃物では、はさみや小刀でも小さなけがの事故は起こりやすいが、彫刻刀は特に気をつけたい。木版画などの製作時、専用の彫刻台（板）を用いない場合は、利き手の反対側の手で板を押さえて掘り進むが、このとき彫刻刀の刃の進む方向に手を置くと、誤って彫刻刀を刺してしまうことがある。このとき、板を彫ろうとしている利き手には、強く力を入れた状態なので、思いのほか深い傷となることが多い。

また、けがの多い用具の一つに段ボールカッターがある。段ボールに刺して切るような場合、裏側が見えにくく、また、のこぎりのような刃が付いていて、傷が大きくなりやすい。

接着剤は、速乾性のものでの誤接着があり、瞬間接着剤などで指を付けてしまうと、専用の剥離剤がないとなかなかはがすことができない。

いずれも、過剰に心配して使用を避けるようなことをしては活動ができないが、危険性は十分認識しておきたい。

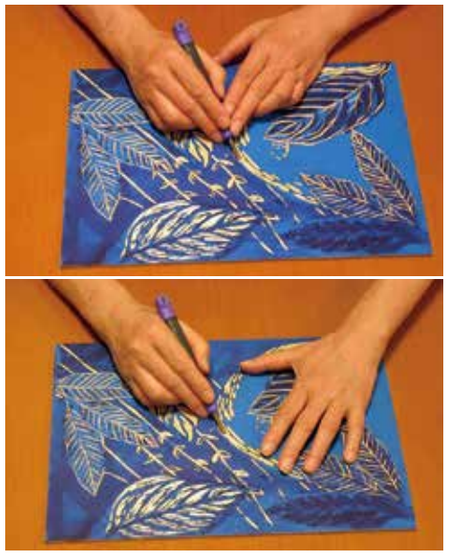

図５．彫刻刀の使い方（上：良い例、下：悪い例）

2. 材料や用具の安全な扱い方の指導

材料・用具の安全な扱い方の指導として、ともすると「禁止事項」のみを強調し、板書などで列記する例を見かける。それも一定の効果はあるが、大事なのは「正しく安全な使い方＝最も効率的で抵抗感のない使い方」を実感的に身に付けることであり、なぜそれが正しいのか、子ども自身が理解し、納得することである。禁止すればよいというものでもない。

また、安全な扱い方とは、使う際の使い方だけではない。片付けや管理も含めた、総合的な「扱い方」だと理解することが重要だ。

○「安全な扱い方」の考え方（はさみの場合）

安全な扱い方
- 使い方：利き手で持ち、反対の手で紙をもってゆっくり切る。刃の進行方向を持たない。
- 取扱い：刃を開いたまま机上に置かない。受け渡しは、閉じて刃を持ち、相手に取っ手を向ける。
- 管　理：ケースや刃先カバーを付けて、道具箱などに入れる。

図６．紙を動かしゆっくりと切っていく。

図７．取っ手を向けて安全への気配り

図８．しまうときは刃先カバーを付ける。

○「安全な扱い方」の指導

必要に応じて繰り返し確認

教師の説明
教師による実演など

子どもが実際に取扱う
使い方を試すなど

子どもの実感的な理解

3. 活動場所での安全点検

図画工作の授業では、造形遊びの活動の場合など、教室や図工室を出て活動する場合がある。また、教室や図工室内であっても、普段の授業では使わないところ（窓や天井など）を使うこともある。

いずれにしても教師は、予想される子どもの行動や、環境の改変・物品移動の可能性を考え、しっかりと事前点検しておく必要がある。以下の点など、特に気を付けたい。

教室・図工室	・子どもの動線の床などに不要な物品が置かれていないか。 ・イスや机のがたつき・破損はないか。 ・棚などの転倒防止・収納物の飛び出し防止などできているか。 ・不要な刃物や鋭利なものなど置かれていないか。 ・窓などに落下防止策はなされているか。 ・その他
校庭など	・プールや水場などの衛生面は大丈夫か。 ・遊具など高所の安全対策はできているか、ネジのゆるみなどないか。 ・砂場やグラウンドなどに危険物が埋まる・混ざるなどしていないか。 ・（造形遊びなどで）設置されそうなもの（ひもなど）が、他の学年児童の危険にならないか。 ・その他

（佐藤賢司）

15.中学年　立体に表す活動③

第４学年図画工作科学習指導案

指導者：〇〇市立△△小学校 〇〇〇〇
日　時：〇〇〇〇年〇月〇日
学　年：第４学年〇組（35 名）
場　所：図工室

１．題材名

「ギコギコ・トントンから生まれたよ！」　立体に表す活動

２．題材について

①児童観（省略）

②題材観

目の前に木切れがあれば、感触を楽しみながら「何かつくれそう」と木片と木片を組み合わせてみる。このような子どもの姿は、ごく自然に見ることができる。また、木を加工するためには、様々な用具が必要となるが、のこぎりや金づちなどを使うこと自体に、子どもはものづくりの手応えや楽しさを感じるものである。

このような実態をもとに、子どもたちが様々な木切れと出会い、あったらいいなと思うものを思い付き、のこぎりで木を切り出したり、金づちでくぎを打ったりして立体に表す題材を設定した。木で表したいもののイメージが初めに明確でなくても、材料である木切れに触れながら表現の思いが膨らんでいき、表したいものを次々と思い浮かべるような子どもの姿を期待している。

学習の過程では、「思い通りに表せないなあ。失敗した」と感じる場面もあるだろう。そのときには、技能が伸びるチャンスと捉えて丁寧な指導で子どもが達成感を味わえるようにしたり、別の視点から捉え直すことによって新しい発想や構想が生まれるように導いたり等「失敗を乗り越える喜び」も味わってほしいと願っている。

③指導観

木という手応えのある材料に向かい合って表したいことを考え、表し方を工夫して粘り強く取り組み、自分の思いにぴったりな表現にたどりついてほしい。

指導の工夫として、前学年までの材料や用具についての経験を生かして表現できるように、導入時にこれまで経験した内容に触れていく。木片を並べたり、積んだりしていろいろなものをイメージした低学年の造形遊びの様子や、３年生の題材「釘打ちトントン」で金づちを使った活動の様子等を思い起こすようにしながら、（できればその時の画像を見ながら）どの子にも「できそうだ」との安心感がもてるようにする。

また、発想や構想が生まれやすいように、材料の木切れについては、様々な大きさや形や材質のものを豊富に用意する。さらに、切断や接合については、のこぎりと金づちの使い方をわかりやすく演示するとともに、のこぎりと金づち以外の様々な切断･接合方法を柔軟に使っていくようにして、子どもの思いが実現できるように支援していく。

３．学習目標

木切れの特徴から表したいものを思い付き、木を切ったり、釘を打ったりしながら立体に表す。

４．指導計画（全６時間）

- 木切れを触ったり、組み合わせたりしながら表したいものを考える。（1 時間）
- 前学年での経験を生かしながら、材料や用具の特徴を捉えて、思い付いた形をつくる。（4 時間 ）　本時
- 自分や友達のつくった作品の造形的なよさや面白さ、表し方について感じ取ったり考えたりする。（1 時間）

５．評価について

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
• 感覚や行為を通して木片の形の感じや組み合わせによる感じを捉えている。（ア[知]） • 前学年までの経験や技能を生かして、表し方を工夫してつくっている。（イ[技]）	• 木片の特徴を捉えてつくりたいものを思い付き、材料を生かしながらどのように表すか考えている。（ウ[発]） • 自分や友達の表現に関心をもち、表し方のよさや表現の意図などについて、感じたり考えたりしている。（エ[鑑]）	• 前学年までの経験を生かして、活動中に出会う造形的な課題に粘り強く取り組み、つくりだす喜びを味わおうとする。（オ[態]）

1. 題材の特徴について

中学年の子どもたちは、手などの働きも巧みさを増し、扱うことのできる材料や用具も広がってくる。手や体全体を十分に働かせて、手応えのある材料や用具にチャレンジしていくことが、子どもにとっての喜びとなる。本題材でも、のこぎりで木を切ったり、金づちで釘（くぎ）を打ったりする活動に没頭する子どもたちの様子が印象的であった。中には、家でも木切れを見付けて活動した子どもや、お家の人とホームセンターに行って、親子で木を切ってものをつくった子どもなど、授業時間以外にも活動の広がりを見ることができた。

のこぎりや金づちなどの用具を使ってつくりたいものをつくっているうちに、巧みさを増していく自分の技能を子ども自身が実感していく様子も多く見ることができた。「３年生のときより、釘を打ったりするのが得意になった」「初めは、うまく木が切れなかったけれども、段々コツがつかめてきてうまく切れるようになったよ」等、できるようになったという喜びは、これからの自信につながっていくことだろう。

一方で、本題材で「自分の思うようにはできないな」という場合も、子どもにとって貴重な経験となっていった。「板と板を組み合わせて、釘を打とうとがんばったけれど、板が割れてしまって失敗した。釘の太さをよく考えないと失敗するということがよくわかった。でも、割れた板どうしをパズルみたいにして少しずらして新しい形をつくることを思い付いた」失敗したと思うことが、次の発見や発想につながるという経験は、「うまくいかない時に、どうするかを考える」態度を養っていくことにもなる。失敗することを恐れない、粘り強く取り組むなど、「学びに向かう力、人間性等」を涵養（かんよう）する面でも、このような経験を大切に取り上げて、指導を工夫していきたい。

2. 中学年の立体に表す活動について

立体に表す活動は、空間にものを組み立てることが主になるので、触覚的な活動だといえる。しかし、つくったものを自分で鑑賞したり、見たり感じたりしたことを表現するのであるから、視覚的な活動でもある。つまり、「立体に表す活動」は、手と目の両方を働かせて、立体感「塊の感じ」を確かめながら、体全体を使って活動し、自分らしい表現をすることだといえる。

また、幼いときから子どもは、子ども自身の生活の中で、身のまわりのものを積み上げたりして立体に表す感覚を、遊びを通して経験している。粘土や木切れなどを使って立体に表すことは、元々、子どもにとって楽しいことなのだということがわかる。

中学年の立体に表す活動では、低学年で培った立体感「塊の感じ」を捉える力をさらに伸ばすことを指導者が意識することが大事である。

低学年では、例えば粘土で塊の感じをつかんだり、重量感を感じ取ったりして、手を十分に働かせて立体に表す経験をしていることだろう。そのような経験をした子どもが、中学年になって、自分の表したい思いを、いろいろな角度から見てつくりながら、立体としての存在感を意識していき、「塊の感じ」をさらに捉えていくのである。言い換えると、「塊の感じ」を捉える力を身に付けることは、立体としての特徴や美しさを考えて表すということである。立体に表すことで、自分らしい表現ができたと思えるように指導を工夫することが大切である。

図１．釘を打つことが楽しい。

図２．釘を打つコツがつかめてきた。

図３．友達と協力する場面も。

6．本時の学習

①目標

木切れの特徴から表したいものを思い付き、木を切ったり、釘を打ったりしながら立体に表す。

②準備するもの

【教師】様々な大きさや形の木片、のこぎり、釘、金づち、万力、クランプ、接着･接合する材料（ボンド、麻ひも、針金、ヒートン等）

【子ども】軍手等

③本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価の観点と方法
1．学習のめあて①をつかんで活動する。		
学習のめあて①　木切れの形を生かしたり、組み合わせたりしながら、つくりたいものをつくっていこう。		
【教師の働きかけ】 「木を触ったり、組み合わせたりして、つくりたいものが思い付いてきたね。Ｋさんの選んだ木は、組み合わせると動物になりそうなんですね。Ｙさんは、まだハッキリしてないけれど、お気に入りのこの木切れを使いたいのね。自分の思いにぴったりな形をつくっていこうね」 【予想される子どもたちの姿】 ・枝分かれのところを角にして、可愛いシカの家をつくりたいな。 ・変わった形の家をつくろうって決めてるの。建物の中にテーブルなんかも置こう。 【教師の働きかけ】 「前に学習したことを生かしながら、つくっていこうね。のこぎりの使い方も教えるよ」（画像を見ながら説明） 【予想される子どもの姿】 ・そうそう、金づちのコツ思い出した。 ・のこぎりも早く使いたいね。楽しそう。	・子ども自身が材料を選んだり、組み合わせたりできるように、ブルーシートの上に様々な形状の木片を置いておく。 ・子どもが材料や用具に慣れ、木片の組合せ方や釘の使い方を工夫している様子を見取りながら、必要に応じて安全で適切な用具の使い方を指導する。 ・困っている子どもに、解決のヒントになるような情報や新たな材料等を提供する。	表情やつぶやき 活動の様子 （ウ） （エ） （ア）
2．学習のめあて②をつかんで活動する		
学習のめあて②　自分の思いにぴったりな感じになるように、表し方を工夫しよう。		
【教師の働きかけ】 「今まで習ったことを生かして、表し方を工夫してつくっていこう。自分の表したい感じになるように、前や横や、上から見て確かめながらつくっていこう。」 【予想される子どもの姿】 ・上手く接着できないので、別の付け方を工夫しよう。 ・後ろから見ると、思い付いたよ。	・自分の表したい感じを、いろいろな方向から見て確かめながらつくることをアドバイスする。	活動の様子 表情やつぶやき （イ） （オ）
3．学習の振り返りをして、後片付けをする。	【学習の振り返りのポイント】 ・楽しかったり、頑張ったりしたこと ・思い付いたり、考えたりしたこと ・表し方を工夫したこと ・友達の表現でいいなと思ったこと ・材料の組み合わせを試しながらわかったこと	発言の様子 学習カードの記述 （ア）（エ）（オ）

3．授業の振り返りと発展

●Ｓさんの活動の様子

Ｉ次の導入では、木の枝を手に取ってしばらく眺めていたＳさん。木の枝をシカの角みたいと感じて、そこから「シカの家」をつくろうと思い付き、積極的に材料を集めていった。シカの家に住む可愛いシカもつくろう、屋根はシカの茶色に白い模様を付けよう等、イメージを膨らませて活動していった。シカの角みたいな２本の枝を家の屋根に付ける方法を考えていたが、釘を打つのは無理と判断して、強力ボンドで接着することにした。奈良公園にいるシカを思い浮かべながら、「シカにとって夏は涼しい家がいいなと思うから」と本当にあったらいいなと思いながらシカの家をつくっていった。

図４．シカの家

●Ｆさんの活動の様子

釘を打つことに最後までこだわって作品を完成させたＦさん。「釘を打つときは、失敗ばかりだったけど、無事に完成して、うれしかったです」とカードに書いた。長方形の木片を組み合わせると屋台ができ、ゆったりくつろげるベンチもできると考え付いたＦさんは、時計台や食べ物なども次々に発想してはつくっていった。

途中、まわりの友達に、「屋台でどんな食べ物を並べたらいいと思う？」などと会話しながら楽しくつくっていった。食べ物もぴったりな材質を考えて表していった。

図５．楽しい屋台

●Ｓくんの活動の様子

丸太の輪切りを積み上げて、その量感を気に入ったＳくんは、「見守ってくれる大仏さんをつくりたい」と考えた。

どっしりした丸太を触りながら、それだけで大仏さんのようだと感じながらも、顔や手の部分にぴったりな材料を探していたが、結局、顔や手はカラーペンでも表すことにして材料を決めていった。顔の部分を丸太のひび割れに差し込むようにして固定するようにした。丸太そのものを加工することは難しいので、丸太そのものを生かすように考えていった。

図６．大仏さま

●Ｔさんの活動の様子

森の中のコテージをつくろうと考えたＴさんは、部屋の内部をつくることがとても楽しい様子であった。自分がコテージでくつろぐようにテーブルやソファなど細かくつくっていった。窓を付けて家らしくしたいと考えたＴさんは、そこだけ色を付けて窓らしく見えるように表し方を工夫していった。屋根をつくるときに、厚みの薄い板が上手く合わさるように、芯材を入れるアイデアを友達から取り入れるなど鑑賞の力も発揮してつくっていった。

（福岡知子）

図７．森のコテージ